

弁天様のまなざしを、 未来につなぐ――

五十嵐さんが「津奈木を大切に思うみんなの気持ちが形になった」と話すように、《海渡り》は多くの人が協力して完成しました。糸を張る人、力強く引き寄せる人、柱に結びつける人、料理で支える人―。それぞれが違う作業を担いながらも、そこには笑顔が広がっていました。参加者に話を聞くと、地域への思いがあふれていました。



みんなで作り上げた《海渡り》
ずっと続くとよかね――

林田 廣美さん（日添）

生まれも育ちも津奈木町ですが、弁天様のお祭りは全然知らなかったです。小学生のころから、ずっとこのほこらは何なのか気になっていました。

私が弁天島で糸を結んでいるときも、ちゃんとできているのか心配でしたが、学校側から見たらきれいに張られていて感動しました。

五十嵐さんとは「赤崎水曜日郵便局」から9年以上の知り合い。海の上の学校や島などを使って作品を作ってもらい、《海渡り》がきっかけでここにあった鳥居や昔の祭りを思い出させてくれて感謝しています。祭りや《海渡り》に関わる人が増えていけるよう、一緒に私もできる限りお手伝いしたいです。



これからの人生の
支えになる貴重な経験――

森本 祐宇さん・梁介さん（丸岡）

昨年、お父さんから誘われて楽しかったので今回も参加しました。私たちの役割は、糸をつなぐために、引っ張りながら運ぶこと。早く完成したところが見たいとワクワクしながら頑張りました。最後の糸を持っていたのが印象に残っていて、みんなで作り上げた《海渡り》はとてもきれいでした。

休憩中に食べた豚汁が特においしく、たくさんおかわりしました。磯遊びではエビの赤ちゃんがいたから、えさになりそうなものを探したりと、忘れられない思い出となりました。

《海渡り》を通じて、みんなで協力することの大切さを学びました。来年からもぜひ参加したいです。



喜ばれることを想像しながら
楽しく料理しとるよ――

岩崎 美津子さん（日添）

昔は冠婚葬祭や行事には地区のみんなが参加し、そういうときには婦人会が約100人分の料理を作ります。私も嫁いできてから先輩方に地元の料理を教わりました。《海渡り》制作当日に豚汁やおにぎり、昔からお祭りのときに食べていた煮しめなどを弁天様のお祭りの直会でふるまいました。おいしそうに食べる姿を見ると、私までいやされ、幸せを感じます。

みんなで会話しながら料理を作るのも楽しみの一つです。何十年先までもは頑張れないけど、大好きなふるさとの味が残ってほしいというのは同じだと思います。元気なうちに次の世代に作り方や味を伝えていきたいです。

※直会…神事の最後にご飯やお酒などを飲食すること。



伝統の継承をみんなで
考えるきっかけに――

新立 誠さん（丸岡）

《海渡り》では島で糸を引いたり、鳥居の柱を運んだりと力仕事を任せられました。ふだんとは違う視点で海に関われることにすごく新鮮味があって、心を打たれました。

私は競舟チーム「津奈木海龍」に所属し、13歳からこぎ続け、海と共に育ってきました。台風や新型コロナウイルスの影響などで競舟大会が平成29年から中止が続き、最近では子どもと海との距離が少し遠くなったように感じます。弁天様のお祭りも競舟も次世代へ継承していくべき町の文化です。《海渡り》もいつまでも続く伝統行事になってほしいし、競舟の乗船体験などを通して、子どもが海と触れ合えるような機会と一緒に作っていききたいです。